

ミオヤの光 吉水の巻

宗祖……………	一	あみだぶと心を西に……………	四五
宗祖の道詠……………	一三	吾祖の選択……………	四七
あみだぶといふよりほかは……………	一五	心行効果の内容……………	四九
往生は世に易けれど……………	二三		
雪のうちに……………	二五		
池の水……………	二七		
月影の……………	三五		

宗 祖

抑佛教は精神的宗教なり、宗教的修養の功果は精神にあり。吾淨門は佛教なり、然らば精神教なり。吾人は吾祖の垂示に則り安心起行を設立すると共に、其心行の功果たる人格にも吾祖を範となさざるべからず。吾祖の人格に倣はんと欲すれば、人格要素は那邊に存するかを研究せざるべからず。吾祖の人格は是靈格なり、其靈格を形成せる要素は即ち彌陀の靈力なり、靈光なり本願力なり光明なり。此の靈的光明獲得したる精神即ち三和に靈北せられたる神識即ち靈格なり。

吾淨門は導師も觀經疏に觀佛三昧を宗とし又念佛三昧を宗と爲、一心廻願往生淨土を體と爲すと、吾祖もまた導祖の範に則りて念佛三昧を宗として一心廻願の功積り徳爲して即ち吾祖の靈格をは形成せり。念佛三昧とは如來心と衆生心と冥合一致したる心理なり、若し佛心と合一する時は即ち見佛を得ん。佛我無二なり。在來の我にあら

1

二

かして彌陀の中の我なり。彌陀大我の一員たる我なり。然れば則ち人格革新して靈的生命と爲る處即ち是往生淨土なり。精神主義は物質の有形に重きを認めず、精神更生する處即ち往生なり。往は更なり、即ち精神が彌陀大靈界に生れたるなり。

吾祖西没して己に七百年、澆季の現代は宗教の暗黒時代なり。盲信時代なり。唯吾祖の精神的皮膚だにも存生せず。本素絹と大衆衣との被服だに今は稀に見る處となれり。口に稱名し手に念珠を繰れど精神は唯世界動機の事のみを操り替へされつくあり。祖訓の安心起行の形式のみを固執して未だ實精神的の實修の功果を學ばず。吾人は流を吉水の法流に汲むの幸を得たり。吾祖の訓言に本づき安心起行を立べきと共に心行の功果たる吾祖の救靈靈化の本質を修めて吾祖の靈格に倣はんと欲す。吾祖實修實行の結果、人格を以て範を後學に垂れ玉ふ。心行の要は、一枚起請の唯往生極樂の爲には、愚鈍の身になして唯一向に念佛すべし。

實に唯一向に念佛すべし、是往生淨土の要門密嚴淨土を開くの寶輪なり。一心に念佛して淨土の門を開けよ。彌陀は顯はれ、光明に靈化せられむ。去此不遠の金言我を欺かざることを覺られん。唯一向に念佛すべし。未だ大事を明らめず何の暇あつてか他事を思ふの間かある。一向念佛し心々連続し行往坐臥に念々稱名し心々專注して離れざれば、餘念なければ光明常恒に加はる。何人か發明せざらん。何人か現世に見佛せざらん。吾祖が廓然大悟して無生を得たる如くに孰か無生を得ざらん。未だ精神的に往生せざる人は、唯現在の我を固執して彌陀に献ぐる一心缺くが故なり。吾人は實に自から知らざれども實に無明罪惡の凡夫なり。此肉の生命より見るも、蛆蟲以下の動物なり、のたくり上つて人類と進み來りし生物なり。此身心絶對的大靈なる彌陀に献ぐるに吝ならず、此蛆蟲の如き我等を彌陀は汚穢として捨て玉ふとは得も思はず、必ず救靈し玉ふと信す。

また此罪惡の我を、此肉の死を待ちて而して後に救靈し玉ふとは信せず。いかにとなれば今日にして救はず形の臨終を待たば、其中途に於て、精神は惡魔の爲に奪はる

11

べし。何ぞ大ミオヤの大悲斯の如きの疎愚なるべけん。

また吾大ミオヤは法身の本源より吾人に靈性の伏能を賦與し玉ひて極小より現在の人類にまで向上せしめ玉ふ。

また一方には報身佛として終局目的の方面に巖臨し玉ふて慈智の心光常に照して吾人を救ひ玉ひ、尙分身して應身を此土に現出せしめてミオヤの聖旨を示したまふ。

宗教的生命は人生の一大事なり。若し人生一大事を明らめず、頭頂の寶珠を開きて靈界に歸るの資格を成すの功なければ、人生何の目的かある。人々此一大事の重任自己の自分を自覺せずして徒らに人生を經過せば罪此より重きはなし。形の父を殺し母を殺し君を殺すよりは己がミオヤより賦せられたる靈性を殺すは、無量倍の罪重し。いかにとなれば一切の罪惡は靈性を活用せざるより起因するものなればなり。若し靈性にして開發せば、一切の惡は自から律して作さず、一切の善は此より生ず。人生一大事の自己の天分を自覺せずして宗教は老耆者の玩弄物の如くに視做す。

吾國の宗教の未開なる之を思ふ毎に慨歎せざるなし。喩へば茶道插花の閑事業には初傳乃至奥傳などと稱して、其階級的に練修せしむ。然るに精神生活の一大事たる宗教的練修の爲には階級もなく精神的の修行もなく、また試験もなければ向上進行の程度も定まらず。是の如きの風習は罪人民にあらずして大宗教家の日本人を救靈するの出現せざる故ならん。

されど禪門の千七百の公案によりて工夫究盡せしむる如き又精神修養の進みたるものなり。また眞宗の感情的信心開發の機を與ふる如きも然り。

吾祖の訓示なる安心起行の形式は喩へば東京に登らんと欲せば斯國道に就て一直線に往けよ必ず達せんととの導きは、初心より乃至は其道に入りて、其過程には必ず進行の程度として効果の階級なかるべからず。大經に三輩あり觀經に九品あり。其品位の分別する所以は各個の安心起行の功果として形成せる人格に階級あり。喩へば人の本來精神は月にして如來の光明は太陽なりとすれば、日光加はるに従て月光盈缺あるが

如く、人の精神本闇黒なれども、如來の靈光加はる毎に人格向上す。其階級は行者の心念即ち神識に剋成す。其性相體力作に依つて人格の階級は定まらん。此五が人格の要素にしてまた人格を形成す。また人格の顯現たり。

聞説く、現在の宗教者は、世は大かたは靈に渴きて靈の水を要求す。然るに宗教家の水の説明を能くするもの比々然り、然り而して自己に貯へたる靈水を與へて彼が渴を救ふもの稀なりと、實に然り。吾祖の訓示なる安心起行の形式を能く説明して他に示すとも、未だ吾祖の三昧證入の功果内容本質を自から習ふてまた他に傳ふる者稀なり唯徒らに懷の寶を數へて自己に半錢の價値なし。

教祖世尊涅槃に臨み玉ひて示し玉ふ。自今已後我諸の弟子展轉して之を行せば、則ち是如來の法身常在にして而して滅せざるなりと。教祖滅し玉へども其法身は吾祖の精神に靈活して世の光明と成りて現世當來を照し玉ふ。如來の眞法身は常住にして滅せず。吾祖の三昧定中に發現したる靈物は永恒に存在す。吾人も祖の如くに念佛三昧に凝神して心々念佛して止まざれば、吾祖の三昧定中の彌陀は吾人の性と相と體と力と作に發現せむ。

一心念佛三昧は發得を期すべし、三昧成就は人格の要素なり。三昧成就を期せずして相性體力作の成形望むべからず。此要素は吾祖を形成したる資材なり。吾人は吾祖に學ばんと欲すれども天稟の資質行業の多少は自然に程度相同じからず。吾人が一心三昧に功を積むとも自から皮たり髓たるの品位はなかるべからず。是吾祖の皮髓、成らん爲の實修を要する所以なり。

吾祖の一枚起請の訓示は心行の形式を示したるものにて、そが實行の功果は吾祖は吾祖の人格に形成せられたり。吾祖が彌陀靈化の本質内容より洩れ出たる言語に依て其深奥なる泉源の一端を察せんとせば、いかにせむか。

語に曰く「詩三百一言にして之を覆へば曰く思ひ邪なし」と、詩歌なるものは理窟に非ずして其内容心情を洩すものなり、まごころなり内容なり。月に花に情を陳べ無常

に戀に情を露す。戀しき故に戀しいと曰ふ如し。

吾人は吾祖が中心内容の心情より洩露し玉ひる道詠に就て吾祖の彌陀靈化の内容を窺はんと欲す。吾祖が心情より洩し玉ふ甘き泉に依りて彌陀甘露の妙味を味はんと欲す。斯彌陀の甘露は吾祖が靈的生命を養ひたる養分なり。斯靈的甘露により吾永遠の生命は得らるべし。

吾人は赤子なり。吾祖の洩したまふ靈の乳によりて靈の糧として養はるる時に、吾人も祖の如くに靈が成長して他人にも其靈乳を頒つことを得るに至らん。

吾同胞よ吾祖の靈格を究めて吾人も學ばんと欲するに、吾祖もまた人たり、形質は地水火風空識の六大たり、解剖學上の人體組織を以て人たるなり、此解剖學上に一切の人類と一分も異なることなし。また生理學的に生活したる人たり、榮養系統も筋骨系統も他の人と殊にする點を認むる能はざるべし。今吾人が宗教的模範として之を究め之を學ばんと欲するものは形質にあらず、精神的靈質にあり。

十聖の法然房烏房子もきぬ男にあり、形を見れば法然房實を云はゞ彌陀如來と云ふ點にあり。吾祖が力體の那邊に彌陀存在せる哉を知るにあり。吾祖が靈化せし如くに吾人も靈化せんとにあり。

死後の問題にあらずして現に吾人の人格形成の問題なり。祖師の靈格を形成せる要素を研究して我等も宗祖に倣ふて自己の靈格を形成す。

往生成佛。導祖も成佛は難く往生は易しと釋せられ、教會的團體的の教會目的には願共諸衆生の往生安樂國の意識然らん。個人的靈格を形成するには成佛の語適す。願作佛心願度生心等なり。靈格を作るが即ち成佛なり、得生の資格靈格を吾祖に學んで靈格を形成するを目的とす。

吾淨土の法王の座の右に侍り玉ふ吾祖の聖座下に白して言さく、吾祖淨土に歸り玉ひてより已に七百餘星霜を経たり、世澆季に及んで宗祖が樹へ玉ひたる寶樹は一度根深く莖太く、枝葉繁茂し花果彌盛んに、果實より傳播して聖靈の子甚だ數多なりし。

然るに今や聖意の眞を失ひ唯枝葉のみ分れ、宗教の言の葉のみ繁りて心靈の花なく、靈の果を結ぶものに至りては甚だ稀なり。若し是の如くになり行かば終に吾祖の寶樹は言の葉のみに終らんとす。吾人は末法澆季は救ふべからずとして之を傍觀するに忍吹す。何となれば、世は益々進化の實を擧げ日進月歩の日の丸の幡を建て、文明に向ふ。吾祖の在世には大博士すら未だ耳にせざる天體と地球説とは實驗せられ、十萬億士の標たる須彌山は己に倒され、地球上に曾て聞くことなかりし泰西各國は今隣國と呼ぶに至れり。

吾等が大ミオヤに告して白さく。あなたの賜なる糧によりて此生命を活くることを得。あなたの御加被力を被りたる我等が同胞が植耘等百般の苦勞を経て私共に分ち與ふるものは此糧を分ちて而してまた私共が御恩寵によりて活ける靈の糧を我等に求めんが爲なり。然らば大ミオヤよ我等は我糧を受けて活る生命生活を以て、あなたよりうけつゝある靈の糧をまた頒ちて彼等に報いんと欲す。願くば我等がミオヤよ、彼同胞等に報い得るよう御加被力を與へ玉へ。

大ミオヤよ、私共は此糧を受けざれば活くること能はざると共に、あなたの賜なる靈の糧をうけざれば、靈の生命なる法身慧命は續くこと能はざるものと信す。然らば我は此糧を食せんとするに先だちて至心に餘念もなく、慈悲と智慧との聖意を念じて靈のいや榮へんことを祈り奉る。

我等は聖き名を稱えてあなたの聖意の我意に満しめんことを祈り、旭よりは輝き夕日よりは麗はしきあなたの慈悲と智慧とに充しめ玉ふ我等を愛し玉ふ御みすがたを念ひ奉れば我等が心は潤ひて悦に充されぬ。亦大變なるあなたを專念して我亡する時は無碍光の裡にあなたの慈悲の光明に充されてます。靈のいや榮へんことを祈り奉る。

我靈はあなたの靈力に充たされざれば飢へつかれて靈活を動かすこと能はざるなり
 あなたの眞理を念すれば法喜充滿し、またあなたの内に一心斷念して萬相忘るる時
 は禪三昧の味を味ふことを得。

私共はあなたの賜なる智慧と慈悲と靈化との糧を分て之を消化し、己が靈的生活の
 力として聖旨の命令の下に潔よくつかへ奉らんことを希ふ。

吾等が大ミオヤよ、我等はあなたの特恩寵によりて人間の身を受け、靈の糧にて
 活くべきの資格を得たるも、靈的生命として聖意の命に随ふてます／＼向上して、眞
 善美に向つて進まざれば此生命を與へられたる甲斐なきものとして、動物よりは悪き
 ものなれば、あなたの光明を離れて自から闇黒の中に落ちゆくは自業自得、あなたの
 御慈悲の手に自ら投ずること當然なりと信じ奉る。

宗——彌陀と人、即ち大我小我の完全なる調和を得たる吾祖の靈格を中心とし、吾
 人も之に倣ひ其心行の功果として、

——趣——自己の靈格を形成するを目的とす。

宗祖の道詠

○心に迷悟善惡を具すこと

池の水人の心に似たりけり濁りすむこと定めなければ

○萬法中撰擇本願念佛總客體の法を標す

あみた佛と云ふより外は津の國の難波のこともあしかりぬべし

○主體の法に約して

往生は世に易けれど皆人のまことの心なくてこそせね

○内容愛

我は只佛にいつかあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなき

かりそめの色のゆかりの戀にだにあふには身をもおしみやはする

○愛戀して未だ遂ざるは業障覆ふ故に

雪のうちに佛の御名をとらふればつもれる罪をやがて消へぬる

○縁熟して三昧に入る

あみた佛と心を西にうつせみのもぬけ果たる聲ぞ涼しき

あみた佛に染むる心の色に出でば秋の稍のたぐひならふし

○啓示

あみた佛と申すばかりをつとめて浄土の莊嚴見るぞ嬉しき

○安住

月かげの至らぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ

○無碍光中の生活

さへられぬ光もあるをおしなべてへだてがほなる春がすみかな

○彌陀と共に靈的活動

極樂へつとめて早く出で立たば身の終りにはまのりつきなん

あみた佛と言ふより外は津の國の

なにはのことあしかりぬべし

彌陀は選擇の能人、衆生の心意を統一して金剛ならしめん爲に、十方に選みて西方
 とし、諸佛に選みて彌陀を取る彌陀を標として萬徳の宗旨を、票し淨土を目的として眞
 善美の極致を顯はす。

選擇の義。彌陀は一切の兪惡苦を捨て一切の妙善樂を取りて其所居とす。故に、吾
 人が現在の精神は麤惡苦なれば、之を捨て一心に如來の眞善美を得んことを希望す。

然るに凡夫の淺智、十方世界の中に於て何等か眞善美の極致なる、何等か捨つべ

きものまた取るべきもの、自から之を選択するの明なし。故に彌陀長時に選擇して、一切世界中の眞善美を選みて吾人に興へ玉ふ。吾人は現在精神の立脚地なる自然の所感を捨て、彌陀の心靈界に精神の廻轉を望む。いかにして吾人が精神は廻轉すべき。此れ道詠の阿彌陀佛といふより外を捨て専ら彌陀を言は念稱は一の言、心口は一已に彌陀を自己の靈性の要素と爲す其彌陀の觀念心を動かし聲に發し稱名と現はる、稱名に由て自己の心念を益達せしめて益發達す。

聖種、吾人は吾祖の選擇によりて萬法所歸の名號彌陀の聖種なる靈的要素を得たり

宗教信仰の定規——因縁

衆生の宗教心の遠因は一切衆生悉有佛性てよ本具の伏藏性を有す。然れどもこは心地として藏するのみ、伏能のみ。極小の生物尙伏能を藏して、人類として理性顯動態と成るが如く、之を靈性の本因とす。近因は宿因なり、宿因と云も過生の事識るべからず。生物遺傳的に素地を有す。即ち性相學に謂ゆる靈樞性の部分は豊富なる等、是先天的の地質各等しからず、是基数に種を蒔くに沃地と石地との喩の如く、宗教的要素の富めるものと然らざるとあり、此を素地とし、大靈の粹なる彌陀の體を表する名號を聖種として養ふ。

人には生理衝動に食欲あるが如く、靈的衝動として天の一方に向て靈的憧憬の情あり、客體を詮表する名言聞薫は其人の宗教的要素となる。

其表號等は其人の宗教的種子を規定す。後漢の光明皇帝は夢に、眞金色の圓光徹照せる靈體を見て遙かに西天に佛法を求む。光明帝の信仰の客體の表象は金人即ち客體化せしならむ、又唐の導師が淨土曼荼の變相を見て其印象が宗教客體の要素となりしこと疑ふ可からず、ポーロがダマスコの野にて感じたる現象は彼がキリストを神の子として信するに至りし元由ならん。

總安心門は總體に於て彌陀の概念が對象となり、高く遠く淨土に存在するの觀は、

聖經の文より得たる要素習因なり。

別して自己の靈性を發得せんには、靈應身を客體として、一心一境專注凝神若は冥想若は口稱、何れも一心一向の三昧を要す。言ふより外は悉く選擇し一切の雜想妄念は皆捨て、専らにして専らに彌陀を念じ口に稱ふ。是三昧を純熟せしむるの神足なり。喻へば稻を造たる田地には餘の一切の雜草を生へしめざる如くすべし。然るに人の天性素地が肉のみ豊富にして靈に乏しく、外境の六塵悉く塵なれば一心專注にあらざれば三昧調熟しがたし。

名號は法。一切善法即ち三身四智十力四無畏等内證外用萬徳の總合の體乃至十方三世諸佛一切萬法の本體を詮するの名。故に勝と云ふ。

念佛は行。一心に念佛して名號聖種の靈性を開發するの行なり。

集に諸願約するに、僞惡を選擇して善妙を選択すると、其理然るべし、何が故ぞ、一切の諸行を選択し唯一に念佛の一行を選択して往生の本願と爲すや、答て曰く、聖意測り難し輕く解すること能はず、然りと雖も今試みに二義を以てこれを解せん、一には勝劣の義二には難易なり。初に勝劣の義とは念佛は勝、餘行はこれ劣なり。名號は萬徳の所歸、然らば即ち、彌陀一佛に所有四智三身十力四無畏等の一切内證の功も相好光明說法利生等の一切外用の功徳是皆阿彌陀佛の名號の中に攝在す。故に名號の功徳勝れたり。餘行は然らず各一隅を守る。此を以て劣とす。譬ば世間の屋舎の名字の中には棟梁椽柱等の一切の家具を攝すれども、棟梁等の一々の名字の中には一切を攝すること能はず。此を以て知るべし。然らば即ち佛の名號の功徳は餘の一切の功徳に勝れたり。故に劣を捨て勝を取りて以て本願とす。

難易の義とは、念佛は修し易し諸行は修し難し、是故に往生に云く、問ふて曰く、何故ぞ觀を作さしめず直ちに専ら名字を稱せしむ。何の意有るや。答て云はく即ち衆生障り重く、境細心能なるによりて識あがり魂とびて觀成就し難し。此を以て大

聖悲憐して直に勸めて専ら名字を稱せしむ。正しく稱名易きによるが故に相續して即ち生ず。

今名號を以て本願とするの義。名は體を徵すとの義。名號は萬德總持の聖種なり。

譬へは一大樹あり、枝條四方に布き葉相茂り若し此樹木を作らんとせば、其の實に結ぶ種子を得る時は、之を播下し之を培養する時は根莖枝條葉花等悉く成せん。枝條葉花は如何に大なるもまた麗はしきも種子にあらざれば之を種族播布の功なきが如し名體不離の名號は即ち聖種なり。自餘の枝葉等は種族傳播の功なし。

其眞理を徵するに名種子とし如來の眞理を開薫するは是種子なり。此を養ふ時は自己に彌陀の觀念即ち宗教意識の要素となりて之を培養する時は竟に萬德彌陀の靈を成せん。例せば大般若の六百卷は文言甚だ多大なりと雖も如來の靈德を總持するの要素にあらず。大樹の一大枝に過ぎず、果實は其體小なれども樹木の性分全體を包藏す。名號も亦然り。如來一切衆生の性德を顯はさんが爲に聖種の名號を以て信念の要素とす。實に眞理なり。

道詠の「あみだ佛」とは總持の聖種にて「言ふより外」は三業の作用を示す。種子と云ふも樹木の種子の觀あるなかれ。

彌陀名號は彌陀を念持するの表號的種子なり、萬德總具の總持なり。

彌陀の信念を修養する外に自己の靈格を成するの要素なきなり。

一切の萬法の枝葉に選んで彌陀の聖種たる彌陀の信念は吾祖の靈格を形成したる一大要素なり。是法は行専ら彌陀たらんと欲せば、單純に一法一行三昧以て靈格を修養せよ。

就ては彌陀とは萬德圓滿の靈體なることを解すべし。無量光にして無量壽なることを信すべし。彌陀に對する觀念先入の觀念が其宗教意識の要素となる、彌陀の觀念に總と別とあり總して云はゞ無量光と壽となり。

阿彌陀佛といふより外は津の國の

難波のこともありぬべし

阿彌陀佛とは法、いふは行。撰擇の法と行との義。

一心中より擇出す。人心に十界を具す。事十界を造る、十界其中に於ては分て佛界を擇み出す。一日八億の念三惡六趣の念を以て光明の時間を徒らに殺す。無量の光明無量の壽命即ち彌陀なり。念佛なり。光明的靈的心念生命は向上發展して極樂を實現するの心行なり。

口に彌陀を云ふより心の彌陀を引出す。此引出す念益向上すれば即ち彌陀と共に在る處何れか極樂に非ざらん。擇は智慧なり。此智慧は彌陀の光明によりて得らる。撰擇の的に注意暫らくも捨てざれば必ず彌陀は發現せん。彌陀發現する時に極樂は顯はれん。基歎の如きも天國は必しも青蒼の天にあらず神の現じたる處即ち天國なりと。

娑婆と淨土とは彌陀の中に在て、未だ顯ざるは娑婆にて、彌陀顯はる處即ち淨土なり。日す娑婆の心念に使用されて淨土に安住すること能はざるは彌陀を離るる故なり。一切の龜惡苦は彌陀の顯れざる處、美妙樂は彌陀の顯はる處。宗祖の心行を範として阿彌陀佛の外なきを要す。撰擇は彌陀にあり。彌陀を常に離るるものは彌陀に撰捨せられたるものなり。心念常に彌陀と離れざるものは彌陀に撰ばれたるものなり。彌陀に撰ばれたる人の心は彌陀と共に眞善美の靈界に逍遙ふ、一切諸佛と共にたり。

彌陀は一切眞善妙靈的方面の表號なり。一切諸佛の總稱一切萬法の總稱なり。

往生は世に易けれご皆人の誠の心なくてこそせぬ

往生は今必しも死後に期せず。精神的に各自己の靈性の發生を期す。吾祖が靈性發現したる如くに靈性の顯動を主とす。靈性本具なるも未だ顯動態とならざれば、將た何の要かあらん。

靈性發現必しも難きにあらず。還て難きに失せしむるものは一には自己の天性が動

物の代より襲ひ來りし惰力とまた理性が自己經驗已外を信せざるとにあり。而して大抵は本然の靈性を顧みず、人間的の虚偽虚構の覆ふ所となりて靈性を顧れざらむ。

至誠心は靈性の形式的方面なり。至誠の本體は如來の法身の本然の理性なり。本然性にして人間的の虚構なき性なり。本然の靈性なれば顯動し易き念なれ共、人間的に遺傳とし亦後天の四圍に醇化せられて還て本然の性を奸曲せられて至誠に遠ざかる。

人に本然の靈性形式と天性の我と具有しまた理性を具す。理性は自己の善惡邪正を判斷し識別するの能なれども天性我は唯動物慾を恣にせんとす。理性は自己の天性我の慾を制裁するの力なくして竟に動物慾を恣にす。然るに自己制裁し能はざるも他に對しては慚ぢて虚構を作すに至る。天性のみにして理性顯動せざる人には虚構なし。自ら善惡是非を斷するの能なきが故なり。

至誠心は本然の靈性形式なれば、自己の靈性と如來の法身と本來同一の性なり。故に本然の靈性開發すれば法身と相應す。

至誠心は形式にして必ず内容を要す、其形式は先天にして内容は後天なり。内容が衆生の知情意と如來の本願力即聖意と合一す。是人の信樂欲の三心なり。斯心が如來の衆生に對する恩寵と相應す。

雪のうちに佛の御名を稱ればつもれる罪ぞやがて消へぬる。

如來の靈と合一しました靈化すること能はざるは惡業苦の三障あればなり。また五蓋あり、僞弊懈怠とは障りなり。如來の靈光恩寵と合一するに障りなり。また靈化の障りなり。此障即ち惡素質を脱却する能力を如來の炎王光と名づく。

業障多しと雖も靈性開發し靈境を現せんに障りなすものを先とす。吾人は業障が地體と成りあれば、自から業障自覺すること能はず。業障を自覺せんと欲せば所觀の目的を定めて修觀せよ。

觀經疏、日想觀に先づ日を觀せしむる三意ある内に二に衆生をして自の業障に輕重

あることを識知せしめんと欲す。云何か知ることを得ん。教へて、心を住めて日を觀するに由る、乃至又想へかの空大即ち十方の虚空と合一す、乃至一塵不空の相を見ず又想へかの五大皆空にして唯識大のみあり、湛然として凝住す。猶し圓鏡の如し、内外明照にして朗然清淨なりと。此想作す時亂想除くことをえて心漸く凝定す。然して後徐々として心を轉じ諦かに日を觀せよ、其利根なる者は一座にして即ち明相現するを見ん。境の現前する時に當て或は鏡の大の如し、或は鏡の面の大の如し、此時の上にて即ち自ら業障輕重の相を見る、一に黑障猶し黑雲の日を障るが如し、二に黄障猶し黄雲の日を障るが如し、三に白障白雲の日を障るが如し、此白雲の障るが故に朗然として顯照することを得ず。衆生の業障も亦是の如し、淨心の境蔽して心をして明照ならしむること能はず。行者若し此相を見れば即ち佛像前に於いて無始已來の身口意業に造る所の十惡五逆謗法闍提等の罪を懺悔すべし、極めて須らく悲涕して涙を雨し深く慚愧を生じ心髓に徹る。

池の水人の心に似たりけり濁りすむことさだめなければ

初め水を以て吾祖と吾人との比例——人の心を水に喩ふ——體相用——心と氣質。五大と識大に別ち、五大の内、水を以て識大即ち心に例ふことは最も適當せり。故に此道詠に就て吾祖の人格要素なる精神と吾人の精神とを比較して自己の惡質と惡習をして宗祖の靈格に倣はんに、水を以て例んこと吾人に覺り易し。道詠の意は人の心は無常無定種々に展轉して常なきを示せり。清と濁に就て宗教の能と要とを明す。人の性につきては性善の説性惡の説善惡超然の理など諸説ありと雖も、佛教には華嚴の如きは善惡を超たる靈性即ち總該萬有心を體とす。天台には性惡の説あり。

先づ人の心性は如來法身を根底とし即ち如來を父とし靈性の性能具せり。そが形氣を受くるにつきて惡質が備はるに至る。肉慾の如き本は動物生理衝動の必要より出たるも、本能を超て意識的に他に害を興ふるに於て惡と呼ぶに至れり。現まれ靈性の伏

能するに之を顯動的に開發し肉の形氣を使用するに至るべきを自覺せずして肉を慾にし向上せざるのみならず、他に害を與ふ故に惡となる。是煩惱を本とす。人に靈性あり之を開發顯動すべきに依るが故宗教の能あり。

形氣の惡質は獨り自ら脱却し得べきにあらず必ず道を以て之を脱却すべき理性存せり、こゝに於て宗教の要あり。清める水の本性と濁る水の垢質とを俱有せり。故に宗教の能あり要ある所以なり。

水を以て心の體相用を現す。人の心の本體は本水の本性は水素と酸素との化合物なれども氷點已下に至れば氷と爲り高熱に達する時は氣體となる。流動體と固形體氣體と其相は變じ隨て用は種々に變轉すれども水の本質たる潤濕の性は失はざる如く、心變心作迷悟善惡十界三千の相と變現するも其心の本體は變せず。

不變にして隨縁と云ふ。亦心十界の變現、同一の水が火力に依りて沸騰し熱度の激なる如く、衆生極惡の業力心の作業の火鏝の中に煮らる。或は餓鬼の我慾の水と變じ吾人の心は邪見憤怒の熱火に胸を燒き他に害を及ぼす。また我慾の水は他人の苦樂に關して毫も同情なき餓鬼なり。或は汚水の如き畜生の心ともなり、或は智者とすべき清水と流れ、風に煽らるれば傲慢の波と爲りて高く打揚ぐ、或は清き二乗の心ともなりすべての靈に渴く者を救ふ菩薩ともなり。ほとくれば十方に遍滿する相ともなる、心水の不可思議なる。

本心と氣質。水の本質、同一の物なれども流れ河の水は種々の水癖あり、そは流れ來る泉源に種々の硫酸カルシウムの如き等の垢質が混濁して水に種々の質を殊にせしむ。人の本然の心と同一なるにしても、父母及祖乃至生物の遺傳素質が泉源より、種々混濁して各自の氣質を特殊的に稟けしむ。天源家が十二宮の質を天運循環して宿命的に特殊的に氣質を稟くと云ふ如く、天源師の宿命主義は兎に角に、各個人は氣質が種々に稟つゝあるは疑ふべからず。また多血質膽汁質粘液質神經質の其體質を殊にするもまた然り。各自は自己の氣質が何れにか傾あれば之を淘汰して短を矯正し長を發

揮せしめて益改善すべき本心を開發して氣質を淘汰して氣質を本心の命に順はしむべきは勿論なれども、尙進んで靈性を開發して靈性の光明に依りて自己の精神生活を規定するに至らば即ち靈格に達す。

天性と靈性の精神生活の水の喩

各祖の靈的生活は八功德池に喩ふべく。一般世俗的精神生活は五濁の水に例すべし今暫らく兩方の精神状態を説明を試みんか、一般の精神生活は五濁水に感濫して昏々擾々名狀すべからず。

五濁とは劫濁劫濁とは謂ゆる時代々々の潮流に漂溺して善惡に拘はらず流行の病に感染して熱を發して毒に中ること是なり。

古今に通じて俗物の常として時には軍の使命にも從事し選舉の運動にも奔走したとひ身は僧たるも凡物は時世の風潮に漂溺さる。濁水時代の政治思潮に漂されては、實ならば政治家輩が濁流に没する時は超然として神聖慢すべからざる態度を取て彼等を濁波の裡より救濟せざる可からざる身をも自覺せず、却て自ら濁濁の政治家杯を氣取て其濁流を自ら愧とせざる如きは實に憐むべきである。宗祖時代の南都北嶺の僧侶輩の動もすれば甲冑を身につけて念佛停止の訴訟を發したる如きの聞くさへ汚はしき風を今尙ほしつゝある、時代の流行病に感染しつゝある僧の心の濁濁昔にかはらじ。五月蠅き山坊主其の暴舉を敢て意に介せず獨り超然として風吹けども動かざる宗祖の精神を見よ。神を淨土に逍遙する聖者の爲にはいかに雷鳴するともみ空さやかに照りわたる月には障あらざりし。時々々の風潮に世界を覺らしむる徳は有れども漂はさるる如き事はなきなり。

見濁とは人世觀目的、人間の智見の濁なる恰も濁水に底の見えぬ如く、正知見の見る心が濁れり。故に斷常二見の惑を生ず。斷常二見とは人の精神識も此身體も現在實有なれども死すれば身心共に斷滅に歸して遺るものなしと認むるが斷見と云ふ。此神識も人間は人間とし本來自然に一定して變るものに非すと認むるは常見と云ふ。今識

心の本體を水に例ふれば、山水は全く山より本元素が湧出し而して水は海に入れれば全體に滅し已ると計するが如く、彼らは水の原素は決して山の川源より初めて成るにあらずして氣候の關係上、水蒸氣が凝て雨となりまた山の樹木などに貯しものが流れ出るもので、海に入りしとて蒸發し騰れば氣體と變するものは、本體が決して滅する爲にあらざるを知らず故に斷見に陥るなり。亦常を水に喩ふ。水が一定して流動物たる事なくして蒸發して氣體と爲りまた氷點にて固體と爲る事を知らざる故に心も一定したるものと認めしなり。

煩惱濁とは生物自己の弱點貪嗔痴慢是天性肉我の生活を支配する生理衝動が動物の本能上系統的に人間的に發達せる衝動なり。食欲生理上の榮養生殖の慾の如く即ち生理自己保存の欲が意識的に進みて、自己の靈格を作らんとするにも此肉慾に濁されて清淨に靈徳の光を放つことが出来ぬ。或は嗔慢是自己の靈格を發揮せしめざる惡素なり。是は外界よりして己が靈を濁亂するものに非ずして自己の内に伏在する生物祖先傳來のものなり。己に此衝動具するに外部にまた此惡徳の動機充滿せり。是凡夫の常として自己の天性に支配せらるる爲に自ら超然として身獨度脱の靈性を顯はすこと能はざる弱點なり。故に止むなく濁瀾の中に生息するに至れり。聖法然の靈格を見よ超然として己に克つる美徳仰きても餘あり。

衆生濁は社會の流行弊風、衆生とは五官を有するもの動物の中に今は特に人間に就て云はん。今云ふ社會なり。諸の機制的團體なり。種々の要素を以て組織せる社會なり。此社會には最も大勢力の刺戟なき時は相互の間に善良の風は行はれず、動もすれば弊習に流れ易し。雑多の人間の集合する處に惡風は他に感じ易く良風は化し難し。爲に濁流の社會に氣を呼吸して生活に不識々々惡風に化し易し。内に自己に煩惱の惡衝動あり、外の社會の弊風賭博勝負事奢侈放逸等さま々の惡徳が世に行はるる之に感染して竟に人格を墮落せしむ。

社會動機、内に美徳を莊嚴するの意志なく菲美に奢侈に流る。聖法然を見よ叡山の

僧侶共が紫衣金襴に俗眼を曇まして自ら誇りとする社會にも、獨り黒素絹に大衆衣金剛草履にて宮中にも昇殿する如く社會の濁流に立て超然としてその人格、上王公より下庶人に至るまでを欽仰せしめたる靈徳仰ぐべし。

命濁。精神生活難、命は生息生活なり肉と及び精神生活なり。身とても人はたとひ盗みたる財より得る食物とても養分富める時は身を肥大ならしむ。然れども之正命にあらず、此身の生活も濁流に在て泥水をのみて生活する勿れ。渴しても盜泉の水を飲まず。然るに世間を見よ全く之に對し自己の正知見より照して疾しからず生活するものいかに、炎天に汗を流して車を曳く車夫のいかに正しきかを見よ。檀越が汗膏より出でたる好意の膳に向て保存せる我生命いかに彼等に較ぶべき。殊に精神生活に至つては己も全く彌陀の子として精神生活せるや、汝が呼吸の源は何れより發するや。精神生活は即ち命なり。若し靈の糧なくして靈の生命あるなし。自己の精神生活を顧みず四趣三惡の念々業を以て惡の生命を養ふなかれ。我祖が常に念念念佛して餘念なきに倣はん。

五濁惡世とは此宇宙の本體然るにあらず。自己の精神にあり。世は悉く五惡の中譬へば大火の人身を焚燒する如きに有ても人能く中に於て一心制意、端正身正行、獨作諸善不爲衆惡者、身獨度脱、獲其福德度世上天泥洹之道。

社會は濁流に流れ易し若し宗教家にして之を救濟せずば誰か能く之を救ふものぞ。

月影の到らぬ里はなけれどもながむる人の心にぞすむ

如來の光明遍く十方世界を照して念佛衆生を攝取して捨て玉はず。佛光普く照すに唯念佛の者のみを攝する何の意あるや。答て曰く。此に三義あり。一に親縁を明す、衆生行を起して口常に佛を稱すれば、佛即ち之を聞玉ふ、身に常に佛を禮拜すれば佛即ち之を見玉ふ。心常に佛を念すれば佛即ち之を知り玉ふ。衆生佛を憶念すれば佛亦

衆生を憶念し玉ふ。彼此の三業相捨離せず故に親縁と名づく。二に近縁を明す。衆生佛を見んと願すれば、佛即ち念に應じて目の前に在す、故に近縁と名づく。三に増上縁を明す、衆生稱念すれば即ち多劫の罪を除く、命終んとする時、佛聖衆と自ら來りて迎接し玉ふ、諸の邪業繋能く礙るものなし。故に増上縁と名づく。衆生と如來心との關係に、親縁は内容の親密の最深なるを明し近縁は形式的に近縁、増上縁は強盛の力用ありて攝救す。内容の親密は即ち感情的眞髓に於ての親密なり。此に母子的の愛と異性的の親愛と靈我大小冥合の親愛とを明す。人の赤子より嬰兒等の母に於るほど親密なるはなし。靈の親愛もまた然り。初めは念佛者が宗教的感情未だ發達せず、小兒は泣聲に應じて乳を與へらる如くに、一心に念佛す。稱名は泣聲に例し、念佛するは乳をのむに例す。團食思食念佛は靈の糧即念食なり、念々常に念すれば、靈的心念發達してつひに見佛三昧に至らん。如來は吾人の靈を養ふの慈母たり。吾等は如來の慈悲を憶念し愛慕する處より、靈的生命は得らるれ。慈想の母の面かけを愛念して吾人の愛てふ麗しき情は發達するなれ。是れ吾人が最も熱き靈的信念の増長する所以なり。吾人が靈的生命を養ふの糧は、如來の聖寵なり。甘露の妙味なり。愛樂佛法味なり。禪三昧の食なり。然るに未だ赤子は靈乳の足らざるものは健兒たる能はず憶念益強ければ、靈の増進も隨つて速なり。嬰兒が慈母の笑顔を見るを喜ぶ如くに、如來慈母の聖容戀ひしけれ、是母子的關係の親縁なり。

次に異性的關係の如きの親愛は、益々靈的心意發達して靈的如來と自己との融合と交渉を得る動機即ち愛念なり。

次に彌愛の増長は益極度に到達し、我と如來真我との親密の因縁は、自己の靈我は即ち大我の如來と一體にして、自我の觀念も法界周遍、如來大我周遍法界、自我の大觀念即ち如來大我にして如來の大我即自己の真我なり。自己の理想我即ち如來大我、我觀念我即如來なり、三密融合入我々入神秘不可思議の冥合は親密の極、是如來の内容なり。また其親密なる關係は肉の親愛よりは微妙なる親密なり。

肉體の親愛に比して一層親密なり、例へば人幼き時は母子の間は最親密なるなし。子は何なる秘密も母の前には明し兼ねるの間なし。然れども稍身の長するに隨つて個人化するに隨つて、自己の胸の秘密は何に親密なる母の前にも露はし難きあらん、若し之を明せば母何に怒らんまた母の前にも恥かしなどの如し。然れども如來の前には本より秘密の不可能なると共に、如來の前には母に明し難きことも心念口言して明かに胸の秘密を明して懺悔するを得。結婚の後は妹と眷との間には秘密なき筈なれども或場合には明し難き胸中の秘密事は發らす能はず、斯る場合にても、如來の前には心に陳べて懺悔し、而して如來の聖寵によりて大に心開意解することを得ん。兄弟姉妹朋友等にも超へて自己と大なる自我の如來との親密なる如き親縁はあらず、是内容の中心眞髓に於て親密なり。

近縁とは形式的に如來心と衆生心との接近不可割の關係を明す。精神的形式即ち時間的空間的に直元的に近間不可離の因縁にて如來の大智慧光明と衆生の理性等の關係なり。此形式を四面に分つ。如來の大圓鏡智と衆生の直觀的觀念との直觀的近縁を明さば、宇宙は如來の絕對的觀念なり、絕對觀念とは主觀と客觀との統一態なり。吾人の觀念の本質と如來絕對觀念の連絡は、本來一體なり。自ら冥想觀念に入て大自觀せよ。自己の大自觀は空間に亘りて限邊なく、客觀界の萬物をも得げすして觀念することを得るは、本來自己の觀念と絕對觀念とは其本質一體なればなり。絕對觀念が自己の觀念として吾に體現せるに外ならず。是絕對觀念が即ち如來大圓鏡智なり。宇宙は一體なる觀念體なり、之を大圓鏡智と名づく。然れば物心二象の萬物は、大圓鏡智中の影像に外ならず。然らば自己の觀念との關係は本來一體不可離の近縁なり。

平等性智。宇宙は絕對的の理性態なり。同一形式の上の現象なり。理智を大海の水海の水に比すれば、一切物心の二現象は、無邊の浪波に例ふべし。天地萬有に天體の星宿より地上の萬物に至るまで條理あり秩序あるは、宇宙の大靈が萬物の因縁因果の萬物中に整然たる秩序の理性存在することは疑ふべからず。萬有に理系の存在するは

事實なり。然らば平等一理系中の萬物なれば、吾人の理性も其連絡は一體なり吾人の理性は一大理性の個人現なり。故に宇宙の一大理性を覺了せんと欲せば自己の靈性を内面より判斷し自覺するの外に道なし。宇宙萬有の生成せし吾人の理性は平等性を根底とす。平等性智は一體の大海水にして吾人の理性は浪波たり。波の體は水と關聯して離るるなし。然らば吾人の靈性の形式の本質は即ち平等理智なり。故に近縁と名づく。

如來の妙觀察智と衆生の靈性の關係。妙智は一體的精神中の現象差別との關係にてまた大海水中の一切差別の波なれば、波と波との間相互の關係も、之を體に約して相即、用に約して相入す、此關係をなさしむるを妙智と云ふ。如來大智慧光明中の衆生心なれば、如來と衆生とは體に於て相即し用に於て相入し、淨土に在ます六十萬の八萬相好身は吾人の信念に相入し、吾人もまた淨土の佛心に相入す。相即相入の關係のみにあらず。内容をも感應して同化せしむ。自然界に在りて靈界と交渉し穢土と淨土と交渉し衆生と佛と感應し、十方三世の諸佛及淨土は吾人一念の中に相入し、吾人の心念に常に萬德恒沙の佛身は相入し、妙法輪を轉じ玉ふ。吾人の靈性は之に判斷し觀察し感應し得るの性なれば、入我々入神我融合の相も此妙智の作用に外ならず。圓融無礙生佛感應不可思議なるは妙智なり。一切萬物中に神は在すは妙智による。衆生心に相即相入し衆生の靈性を開發するは好智の作用、一月天に在て影萬水に浮ぶ。天體無數の星宿は吾人の眼の瞳の中に在りて迫退せず、十萬恒沙の諸佛及佛土は吾人一念中に現す、故に無礙。時間空間を盡して圓融無礙の相入相即の交渉は此妙智による故に近縁と云ふ。

成所作智。衆生の五根五識を靈化して乃至淨土の依正二報の莊嚴を感覺せしむるの近縁、如來は法界身なれば宇宙の一大心靈の妙作用より五塵と主觀の五根識と現するものなれば、如來の相好を感覺するは十萬億土遙なる遠距離より影現し來るに非ず、本來一大心靈界中の不可思議妙用の五塵なれば、一大心靈と吾人の靈性とは本來一體

の本質なれば、其妙用によつて起る妙色莊嚴の依正二報なれば、肉眼の物象が外界より映寫すると同じからず。自己の靈性如來心と相應するより發現し、自己の靈性に現したるものが投映して客體化するものなれば、淨土感見は寸毫相離れず。されば吾祖が或時は左の眼より光を出し、眼に瑠璃あり、形瑠璃の壺の如し、壺にあかき花あり寶瓶の如し。或時は遙かに西方を見やり玉ふに寶樹列り高下心に隨ひ或時は座下に寶地となる等三昧發得の現相は自己の五根に現じたるを投映して客體化す故に近縁なり導師が佛を見んと願すれば佛眼前に現じ玉ふと。

増上縁。如來の靈力の強力によりて衆生の靈を攝化するの機能を増上縁と曰ふ。縁力の強きに因つて自ら同化せらるるの義なり、喩へば日光の力は闇を破す、闇は光を破す能はず、火は物を焚く如き力なり、破闇増上縁、拔苦與樂増上縁、破魔増上縁なり、衆生が佛を同化するの功力なし、佛は衆生を攝化し玉ふ。

吾人は渺たる一惑星の寄生物、絶對無限の大靈力に對して何の力用がある。

攝取同化の増上縁、吾人は實に數ならぬ微なる生物、心の闇き自己、自己の闇さへも自ら明にし得ぬ者、如來の光に照されて初めて自己の數ならぬ愚なる罪惡なることが自覺し得、靈光に照さるゝ時は實に己が心の淺ましき愚かさが認めらるる。初めて如來の無限の靈に依屬する者となる、弱き己の教を求む。

諸邪業繫に縛せらるる如來の増上縁は何なる吾人の罪惡と邪業縛とをも除き去りて、自由の意志と爲し玉ふ。人は先天的の自己の肉に有具せる罪惡の種子伏在せり、即ち肉慾また我欲。普通性とまた人々特殊的に形氣の質による性癖習慣に繋がれて規定せられて自から自己の非を自覺せず、たとへ自覺しつゝも自から脱却するの意氣地なく、自から持前は我力の及ばざる處と恣に爲す、益習慣力は強度となりて煩惱の奴隸たること免かれ難し。肉の罪惡は是自己に繋ぎつけられて解脱自由の清淨樂地に逍遙することの能はざるは實に情なし。此に於てか彌陀の不可思議の靈力は此業に縛られて自由の得ぬ弱き我を救ふて無礙光裡に精神生活せしむるこそ有難けれ。山中の賊

は打つこと易し。心中の賊は征げ難し、迪も弱き意志の及ばざる處、此に於てか憤怒の惡魔胸中に發し來る時に稱名の聲に彌陀心中に顯現し玉ふ。彌陀の慈顏の前には憤怒も自から伏し慈悲の靈容に慰藉せられて浮世の苦さへ忘れつゝ神は娑婆の業縛より救はれて、如來と共に無礙自在の無爲泥洹の靈界に安立し解脱す。何の幸にぞ、行住坐臥如來と共に在りて後命終には亦彌陀と共に無爲泥洹の都に歸るなり。吾人は靈の嬰兒なれば、如來は母の如し、吾人が靈的養育の力は即ち如來の三縁にあり。吾人が靈格的生命の財源ここにあり。吾祖の靈格良に能くこの圓滿なる、是ぞ吾人の師とするものなり。

吾祖は一心に念佛して三業共に運び彌陀の外に我なし。彌陀は眞善美妙一切の靈を選擇の靈能、他一切は虛惡醜兇等の一切の兇を表したるもの、彌陀は世界萬法の中に萬善萬徳を撰擇したる靈體なれば名號は是撰擇萬徳の總稱なり。一心に念佛して彌陀の靈光に同化せらるれば萬善悉く備はり萬徳自ら得る。

口に稱名するは意に萬徳を請求するの表語。

念々念捨して自己の譬へば炭酸瓦斯を吐き酸素を吸収するが如く、自己は是毒素を同化するの身器、念々靈を吸収して自己の靈命の生を養ふべし。

譬ば口に食物を咀嚼し胃腸に於て消化し能く血肉と爲し力と精力として活動するが如く、口に稱へ意に能く消化し靈の血肉とし靈の生活力と爲して靈的精神生活せよ。彌陀身心遍法界、彌陀の靈喰は法界に遍在す。信念能く之を撰擇することを得ん。

あみだ佛と心を西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞすゞしき

阿彌陀佛と心を西に遷——三昧正受の心相

西は所標の尊表示即ち本尊、自己の一心を本尊に。

心は能念 西は所念の尊、自己の心を專注凝神彌陀に投す。

彌陀は撰擇を旨とす。西方は九域を擇んで亂心を息む。七覺支を以て、方を一に爲し心を一にす。

思惟、——西に遷——心は能歸、西は所歸、また能念所念の境、即ち擇法。

正受——もぬけはてたる聲ぞすゞしき

思惟とは彼國依正二報總別の相を思想するなり。地觀の「此の如く想ふ者を名つて極樂國土を見るとはする。」正受とは想心都て息み緣慮並べて亡じ三昧と相應することを正受とす。經に若し三昧を得れば彼國の地を見ること了々分明、思惟とは即ち是定の前方使、彼國の依正二報を思惟し憶念す。正受は前の思想に依て漸々微細に覺想俱に亡し唯定心のみありて相應す。

三昧定中の心象は能念心、所念境、定中一致。入神(内)——感覺神秘融合(外)——高聲

若し三昧を得れば四面玲瓏、音聲清朗にして未曾有なるを感せん。

感覺は玲瓏。音聲清朗。感情は神秘融合。智力は相好感覺。

擇法精進は三昧定中に神を所念の佛に專注し心々相續して勇猛專精なる時は、禪に入りて先づ喜を感じ進んで輕安を覺ゆ。正しく三昧定に入る時は神を彌陀に投映して自己全分彌陀に入り神秘合入我我入、神は月に入りて萬邪皆忘れて清く安く自己彌陀の中に入神して自己を亡す。

導祖曰く 四大皆空、唯有識大、湛然凝淨猶若虛空。

此機に臨んで神識玲瓏として八面に輝き、先づ明相現するなり。或は種々の業相現せん。

境を選む。唯一境を要す、心を統一せしむ。

吾祖の選擇

吾祖の宗旨建立の流義は、彌陀の選擇系統なり。我祖が宗の建立の腐心は法藏の五

却思惟選擇の流義を日本的に操り替へしたるものにて、吾祖が開宗の方法は他門の祖師と趣を異にせり。たとへば最澄空海二師の叢密に於ける何れも唐に入つて其宗師に就て傳法せられし宗義を傳へて開宗せり。我祖に至つて然らず。宗祖の當時に八宗の衆流悉く行はれ居り。今更入宋して新たに宗を傳ふるの要なし。よりは已に流れ傳はり居る中に就て最勝と最易との標準を以て選擇して劣を捨て勝を取り難を捨て易を取るにあり。而して永年苦心の結果導師に本づきて自ら選擇の結果選擇本願の宗義を得たり。明闇善惡真假等待比的に選擇取捨して最勝最易の法を以て宗とす。

若し大聖の選擇もし其勝易を示すにあらざれば凡夫其道得難し。故に宗祖の宗義は選擇を離れては立難し。

選擇淘汰は向上唯一の方法なり。進化説にも自然淘汰あり。選擇は人爲淘汰、雌雄淘汰、自然淘汰は法身が生類に與ふる自然、即ち法身の理性中に淘汰し向上すべき理法の存在すること、即ち自己に靈性具有し外界一切に皆内部の靈性を開發せんとして自然に向上の意義あり。

彌陀の本願は人爲的の淘汰の選擇にして穢を捨て淨を取り劣を捨て勝を取る等の如き、雌雄淘汰と比類すべきものは如來の美を愛するより得んとして精神が野卑の状態より更に向上進化する人間に向ての進化淘汰の理法なり。選擇淘汰の結果は己の人格を向上し圓滿に完成せしむるの理法なり。是を宗教的人格向上の理法と爲す。

自己の人格を圓滿に完成せしめんと欲せば、常に自から精神を恣に濫用せず、専ら精進に選んで彌陀の靈應に思想を潜め彼の美に憧憬し彼の善に協ふやら、彼の眞を悟らんとして意を注がは自然に淘汰すべし。是選擇の意義なり。

選擇の形式は諸佛中彌陀。法萬法中名號。萬行中念佛三昧。五種正行專在彌陀。選擇集は安心起行の形式を示されたるものなり。

心行効果の内容

極樂往生の心行の行程は、初發心より臨終に至る迄の進行の程度によりて九品の階級を分つ。其進行の行程は、衆生心は本闇黒なれども如來の光明加はるに依て靈化す是を月と日光とに例して、彌陀の光明が人格現とすれば、佛陀は十五夜、觀音は十四夜、宗祖は十二三夜の如く、吾人が信仰の覺醒は新月に例すべし。

また宗祖の發心の心相と三昧發得以後との心理状態に於て相同じからず。

吾人は宗祖の念佛三昧の功果たる人格を形成し充實したる神識を模範として實習せざるべからず。宗祖が即ち標準なり。宗祖の心相、具體的人格即ち吾人の理想とすべき處なり。宗祖には初發心以來、發得剋成の人格に到るの進化の階級は漸次に發達し向上したるものと信ず。其の心行の行程が即ち吾人の淨土に向ふ彌陀に到るの行路なり。即ち往生なり。往生は宗祖の理想を實現するの行路なり。九品の階級は各自が生涯に三昧向上の程度に依て得べき果なり。

本願力は彌陀の本體、名號は相。念佛は生佛一致の妙用なり。

大正十三年六月十日印刷同月二十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢 年十二冊貳圓

編輯兼發行人 山崎 辨成

印刷人 東京市小石川區茗荷谷町三十七番地 中川 退司

發行所 東京市小石川區水道端二丁目四十四番地 ミオヤのひかり社

振替東京六六八五一番